

ケンペル・ツェンベリ―シーボルト
その3 シーボルト

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

シーボルト (Philipp Franz von Siebold) は、前2回に述べたケンペル、ツェンベリ―と比べて、一般的にもよく知られており、そのエピソードも多く紹介されている。その分神話的になっている点も多く、また、誤解されている点も多いように思うし、創作の対象になっていることはそれを一層促している。ここでは、筆者が自ら見聞きしてきた点に限って紹介しようと思う。彼が日本に来ていたのは1823年から5年間であり、その後シーボルト事件でいったん追放されて後に、日本が開国してから再来日するが、ここでは初回のみに限る。彼が来日したのは、ケンペルからすると133年後であり、既にバタビアにはその基地とした東インド会社はなく、オランダ直轄領の東インド総督府があった。ケンペルの頃には、最盛期よりは経済活動は幾分下り坂に入っていたが、なお大きな利益を上げ、それで東南アジア全体の貿易が賄われていたが、やがて破産し、オランダの直轄領となっていたのである。なお、筆者の見聞とは、最初の留学先がドイツであり、そこで頻りに交流を持った友人がシーボルトの著作の代表である「Nippon」を持っており、読ませてもらったことで多くのことを知ったことが大きい。その後、小石川植物園に関係したこともあり、ライデンの国立標本館のシーボルト特別室を訪問し、書物には書かれていない事柄を知ったことなどもある。また、ライデンやビュルツブルクのシーボルトにちなんで設けられている植物園も訪れているので、それらの一端も本稿に反映させたい。

シーボルト

シーボルト (図-1,2) は、ドイツバイエルン州ビュルツブルクの多くの著名な医家を出した家系に1796年に生まれ、早くに医学者であった父を亡くするが、縁者の支えもあり、ビュルツブルク大学で医学と博物学を広く修めた。その後、短期間は医師としても働くが、有力者によるオランダ政府への強い推薦を受け、当初からオランダ陸軍外科軍医少佐として任用され、バタビアへ派遣された。これには当時のオランダの国情が大いに関係している。ナポレオン戦争により

一時オランダはフランスの属国となり、その間、長崎の出島は本国と切り離されて存在した。かつて隆盛を誇った海運国オランダもイギリスの台頭の前に劣勢をかこち、南アフリカ、セイロンなどの植民地を失っていた。そのため、オランダとしては、日本との交易の起死回生を図るために有力な派遣者を探して日本の国情を詳しく知ろうとしており、シーボルトはまさにその白羽の矢に当たった人といえる。東インド総督カペレン (G. Van der Capellen) は特別な予算を計上して、彼には科学技術の進歩を印象付ける役割が期待されていたのであり、それにより日本の情勢を知ることが目的であった。実際、彼は新しい医療器具や他の科学装置をもたらし、また、彼自身の医術も優れていることを示したので、たちまち評判となったが、特に眼科の手術に優れていた。このため、長崎奉行所も彼には一目置くこととなり、それまでは禁令であった出島以外での診療も認めることとなり、長崎郊外の鳴滝に塾の開設を認めることとなった。特筆すべきは、それまで医術はどちらかというと秘術として伝えられてきたが、彼は公開を原則としたことである。このために、鳴滝塾には全国から美馬順三、岡 研介、二宮敬作、高野長英、高 良斎、伊藤圭介などの俊秀が集まり、医術のほか近代科学精神ももたらされ、日本の近代医学の源流はそこに求められている (呉1967)。また、それら門人に様々なテーマで、オランダ語で論文を書かせ、その稿は後にまとめられて、「日本学」の集大成「Nippon」の素材となっている。この短いエッセイでそれら全体を紹介することは困難であるので、全体の概要は多くある彼の伝記の一つ (板沢1960) に譲り、ここでは博物学に関係することに焦点を当てる。

シーボルトの博物学

シーボルトは、例外的に出島の外で植物採集を行うことができるようになったが、彼の行った医療行為には対価が払われない代わりとして、多くの植物標本が届けられ、また、生きた植物も多く寄せられたことで収集品は膨大なものとなった。また、シーボルトはシーボルト事件で国外追放された後



図-1
陸軍軍医少佐
の制服着けた
シーボルト
(ネット情報に
よる)

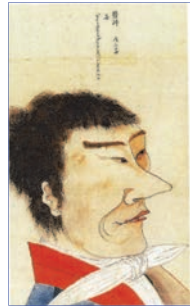


図-2
ある日本人に
よって描かれた
シーボルト像。
当時の日本人の
目にはこのよう
に映ったのか



図-3 オキナグサ：日本植物誌のオキナグサ



図-4 キリ：日本植物誌のキリの図のもととなった川原慶賀のキリの図

も、残ったビュルガー (H. Bürger) やフィルニューフェ (C. de Villeneuve) が収集資料の充実を図り、資料はオランダへ送ったので、国外追放になったからと言って、そこで資料の収集が止まったわけではない。なお、ビュルガーは化学の知識を持っていたので、主として薬剤師として活動し、フィルニューフェは描画に優れ、動植物の絵を描き、また、出島の人々の肖像画も描いているが、西洋画法をもたらした。生きた植物材料の送付はシーボルトの特徴であるが、当初送られた植物は、ブラッセルやゲントで育成されたが、まさにその場所は今日ではベルギーの都市である。ちょうどその頃、ベルギーはオランダからの独立がなされたので、シーボルトは一旦導入した植物をオランダやドイツのブッパータル、ボンへの移送に大きな努力をしなければならなかった。更に、彼は日本から植物の導入を企てる組織を設立し、その導入と栽培の農園も作ったが、その運営は必ずしも成功はしなかった。しかし、その結果、多くの植物材料が日本から導入されることとなり、シーボルトゆかりの植物はあちこちに存在する。その一端を筆者の研究初期に経験したが、それはそれまで困難とされていた葉の細胞の培養である。通説に反して、筆者は葉の細胞を酵素でバラバラにして、それぞれの細胞から極めて高率で植物体の再生に成功したが、その頃例外的に葉の細胞の培養がなされていた植物があり、それは、タケニグサ (*Macleaya cordata* ケシ科) であった。それはまさにシーボルトによりヨーロッパへ導入されたものであり、ドイツでは普通に栽培されていたが、ドイツの研究者は特にそのことを認識している様子はないので、経緯を伝えると驚かれた。また、送られた植物材料の一部は、ライデン大学植物園、ビュルツブルク大学植物園には、シーボルトゆかりの植物として植えられているので、容易に見ることができる。

シーボルトの大きな貢献は、「日本植物誌 (Flora japonica)」や「日本動物誌 (Fauna japonica)」を著して、日本の動植物を網羅的にヨーロッパに知らしめたことある。植物誌には、後にミュンヘン大学教授となったツッカーニー (J.G. Zuccarini) が大きく関わり、動物誌にはテミンク (C.J. Temminck) が関わった。紹介された植物の一例としてオキナグサ (*Pulsatilla ceruna*) (図-3) を示すが、旧制長崎中学校に

通った木村陽二郎教授は、鳴滝塾を遡った奥の丘上にオキナグサが生育していたことを思い起こされている (木村 1980)。

もう一点、ツェンペリーが来日したことで植物分類法はわが国に紹介されていたが、シーボルトはその後50年経過後であったので、植物学の他の分野の形態学や生理学の進展も紹介したことが挙げられる。その影響下で岡山県津山の蘭学者宇田川榕菴は、「植学啓原」を著して、世に植物学があることを知らしめた (高橋 2002)。

本稿を筆者の体験で閉じたいが、2007年5月5日には、ベルギーで用事があったので、そこからライデンへ向かい、地図を求めて、予約したホテルへ向かうとその近くに鯉鱒がひらめいているのではないかと見上げるとそれがシーボルトハウスであり、博物館であった。そのあとシーボルトゆかりのライデン大学植物園を見て、翌日は駅の反対側の国立資料館を訪れた。そこには、シーボルト資料室があり、当時の館長のバース (P. Baas) 博士はその場所へ連れて行ってくださり、「どうぞ自由に見てください」と筆者をその部屋に一人で残された。入ってすぐのテーブルの上には伊藤圭介から贈られた茶色の表紙の植物標本帖が無造作においてあり、その隣にはシーボルトが最上徳内より入手した蝦夷地の木材標本がそのまま置かれてあった。その標本は、大きさがハガキ大で材の絵が描いてあり、その上にはシーボルトのメモ書きで植物の名前や特徴が書かれてあった。

今回はこれで留めるが、この稿の準備中に日本植物誌のキリの図のもととなった一枚の川原慶賀のキリの図 (図-4) を通じて、日本での植物画の成立にそれが大きくかかわっていることを知ったので、その具体的内容については次回に譲る。

参考文献

- 板沢武雄 1960. シーボルト. 吉川弘文館.
- 木村陽二郎 1980. シーボルトの日本の植物. 恒和選書.
- 呉秀三 1967. シーボルト先生 I. 平凡社東洋文庫.
- 高橋輝和 2002. シーボルトと宇田川榕菴. 平凡社新書.